

村尾 治彦（言語学）

Cognitive Domains and Prototypes in Constructions

本論文は、構文の一般的特性と言語特有の特殊な制約を説明する理論的枠組みを提案し、事例研究を行ったものである。従来の研究は、動詞のクラス間に明確な境界が存在することを前提とした動詞意味論的分析と、構文自体を言語の基本単位とする構文文法に基づく分析に大別されるが、いずれのアプローチも実際の構文のもつ基本的特性とその多様な拡張の可能性を十分に説明できない。本論文は、このような従来のアプローチの問題点を指摘し、構文の特性とその多様性を説明するモデルを提案した。さらに、提案された意味地図モデルやそれに基づいて配列された認知領域により、構文間の関係や拡張のメカニズムが自然に説明できることを明らかにした。

第一部の第1章では、構文研究に対する本論文の枠組みを簡単に概観し、動詞主導型ではなく、構文を軸とした研究の方向性を述べている。また、本論文の目的、分析対象となる構文の種類、及び全体の章の構成を概観している。

第2章では、動詞と構文の関係を扱った従来の主要な研究の内、アスペクト、非対格性、動詞の階層性などの観点からの4つの研究を概観し、構文を特徴付ける様々な意味・機能を包括的に扱えない古典的カテゴリー観の問題点を指摘すると共に、構文と動詞の対応の多様性を適格に捉えることのできない従来の研究の不備を指摘した。

第3章では、言語の普遍的特性及び個別言語の特殊性に基づいて、構文の拡張の可能性を予測する制約を述べ、拡張のメカニズムと個々の構文の意味構造の詳細な記述を行い、認知文法と意味地図モデルの統合モデルを提唱した。このモデルは今後の構文研究への極めて有望なアプローチとして注目すべきものである。

第二部では、統合モデルを日本語のテイル構文に応用し、動作持続と結果状態持続の用法を提案したモデルに基づいて分析し、中心的用法と拡張パターンを明らかにした。また、「主体化」という認知プロセスに基づく、動作持続、結果状態持続、状態、経験の4用法を産出するスキーマを提案し、4用法がテイルという共通の言語形式で表される動機付けの解明をした。

第三部では、日・英語の結果構文に焦点を当て、日本語、英語共に拡張の元が共通であることを前提とし、拡張事例において言語間の違いが出るという従来の主張が間違いであることを指摘し、実際は英語の拡張元と日本語の拡張の終点が両言語で共通することを明らかにした。また、拡張には「主体化」、「脱主体化」といった認知プロセスが関与していることを示した。

以上のように、本論文は、認知言語学的アプローチにより日・英語の構文の持つ多様性を包括的に説明した点で優れているが、同時に閉塞した結果構文研究に新たな視点を提供した注目すべき研究とも言える。これらの点で、本論文における研究は言語学における構文研究に重要な貢献をしたものと高く評価される。よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。